

『空の野蛮化』

ベルタ・フォン・ズットナー¹⁾

訳：糸井川 修・中村 実生

前書き

ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン（訳：山根和代）

ベルタ・フォン・ズットナーが『空の野蛮化』（„Die Barbarisierung der Luft“）という予言的評論を執筆した25年後、スペイン北部の、ビルバオから遠くないゲルニカというバスク地方の小さな町で、恐怖と荒廃をもたらすものが空から降り注ぐという光景が現実のものとなった。1937年4月26日の、平和で無防備な町に対してナチス・ドイツが行った野蛮な空爆に激怒したピカソは、『ゲルニカ』という名作、恐らくあらゆる時代を通じた反戦絵画の最高傑作を描いた。今年（訳注：2012年）の始めにゲルニカ平和博物館は、この恥ずべき出来事の75周年記念行事を行った。ゲルニカ空爆から数年後、第2次世界大戦が勃発すると、同様の、しかしより残忍な攻撃がロンドン、コヴェントリー、ベルリン、ドレスデン、東京、広島、長崎の上空から行われた——これらの都市は最も破壊の激しかった都市の数例に過ぎない。日本のこれらの都市で戦後創設された平和博物館は恐ろしい犠牲を伴った戦争を証言しているが、このような戦争をズットナーは予測し、評論を通して避けようとしていたのであった。神風特攻隊の航空機、V-2ロケット、近年のアメリカにおける9.11の自爆攻撃、アフガニスタンとパキスタン国境における無人飛行機による戦争は、見たところ空の野蛮化が終わりそうにないことを示している。

この評論の執筆へとズットナーを駆り立てたのは、トリポリの戦闘において初めて行われた空からの爆撃だったが、評論のテーマは彼女にとって目新しいものではなかった。確かに彼女はすでに何年も前から航空技術の進歩に強い関心を抱き、それが将来国際関係に与える影響を

予測していた。私たちは彼女の希望や怖れを、彼女が毎月書いていたコラムから理解できる。「現代史への注釈」と謙虚な題名が付けられていたそのコラムは、1914年に第1次世界大戦が始まるまで20年間もドイツ語の一流平和誌に寄稿されていた。彼女が最後のコラムを書いたのは、彼女の死（1914年6月）のわずか数週間前だった。洞察力があり、しばしば人を魅了するこれらの論評は、彼女の友人であり協力者であったアルフレート・H・フリートの努力によって、戦争中、中立国のスイスで2巻の分厚い本（それぞれ600頁以上ある）にまとめられ、彼女の死後出版された（『世界大戦を避けるための闘い』、チューリッヒ、1917年²⁾）。彼女がドイツ語で書いた最初の女性政治ジャーナリストとされるのは、主として平和ジャーナリズムの記念碑であるこの著作による。

『武器を捨てよ！』の出版から数十年間、著者はいかに航空技術が空に武器をもたらすかを観察していた。彼女は、「これまで地上や地下で（そして海上や海中で）遂行してきたことを、雲の上や下で」続けることは一見不可能であると書いた。今や戦争という地獄は、天国にまで拡張されたのであろうか？ 相互殺戮という愚行は、今後雲に向かって押し広げられるのであろうか？ 彼女はこのようなイメージを使って、読者に「空の艦隊、空の魚雷や空の地雷」が出現する可能性を気づかせようとした。そしてこのような開発に反対する人々がいないことに、不安を抱いたのである。ここに生まれる新しい分野では数十億もの浪費が見込まれ、地獄の兵器を自在に操るためにまたもや人間の英知がつぎ込まれる。彼女はまた、軍用飛行技術の登場とそれがあらゆる国に引き起こした危機感が、いかに大砲の発達を促したかに注目した。大砲は「祖国だけでなく祖国の空も防備しなければならない」ので空高く垂直に打ち上げられる、今起こっていることは戦争における紛れもない革命であり、全く恥ずべきことである、と彼女はコラムの一つに書いている。人類は「空を飛ぶか、あるいは戦争をするか」という厳しい選択を迫られている、「二つのものがぶつかり合えば、どちらかが退かねばならないであろう」と彼女は書いた。何十年も前にアメリカの偉大な作家で市民的不服従の主張者であったヘンリー・デイヴィッド・ソローが、「ありがたいことに、人間は飛ぶことができず、空を大地のように汚すことができない」と書いた時、彼はすでに彼なりの考えを示していた。

私はベルタ・フォン・ズットナーの、短いが予言的で核心をついた評論が、日本語でも入手できることを嬉しく思っている。それはこの評論が出版百周年記念の年に、少なくとも日本において忘れられていないことを意味している。日本は世界中のどこよりも空からの大量殺戮を体験し、その結果、日本人だけでなく海外における多くの被爆者も深刻な影響を受け続けている。1945年8月の美しい夏の日に、空の野蛮化により広島と長崎の人々は奈落の底に突き落とされた。これらの二つの都市から発せられている「ノー・モア・ヒロシマ、ノー・モア・ナガサキ、ノー・モア・核兵器、ノー・モア・戦争」という緊急の要求がまだ実現されていない

『空の野蛮化』

ことは、不可解で許されないことである。日本における平和博物館、そして核兵器廃絶運動は、このようなメッセージが世界中にはっきりと確実に伝わるよう最前線で努力している。このような運動においても、ズットナーの評論は今日なお私たちに語りかけるものがある。(Peter van den Dungen：英国ブラッドフォード大学平和学客員講師、平和のための博物館国際ネットワーク代表)

『空の野蛮化』

15年から20年前、制御可能な気球や飛行機械を制作しようという計画を抱きながらも資金に事欠いていた発明家たちは、平和運動の指導者を頼ったものである。私たちが空を征服するために援助をしてください、そうすれば戦争は過去のものとなります、と彼らは言った。彼らが持ち出した根拠は、おおよそ次の通りである。国境による分断はなくなるでしょう、というのも空には遮断機や税関、それに要塞は造れないのですから。容易に、そして10倍もすばやくなる交通は、もうすでに鉄道や蒸気船によって実現しているよりも、なおいっそう諸国民同士を近づける筈です。そしてこのように近づき合うことで敵対関係は消え失せるでしょう、とりわけこの輝かしい偉業が広く呼び起こす歓喜の声によって、人々は狭量な憎悪と嫉妬の念を乗り越えることになるでしょう。

この論拠には十分な説得力があったので、平和主義者は発明家たちに必要な資金を喜んで提供したいと思った。しかしながら、周知のように平和の金庫は空である。資金的要求に応えられるのは、戦争省だけだ。

しかし理論においていくら明白で、理に適い、数学的に確実で、例えば $2 \times 2 = 4$ という命題のように疑う余地なく受け入れられるものであったとしても——実際においては突如逆転して正反対を向き、2掛ける2の答えが、同じくらい容易く4以外の任意の数字となる。

今や空は征服されて——我々はあらゆる国境の上を飛び越え、空高く放物線を描き——そしてついに戦争はもう一つの新たな武器を得た。

しかもその武器は、今までに用いられたあらゆる武器の中で最も恐ろしいものであることが、明らかとなった。

結局のところ、論理と数学は正しい。2掛ける2は——たとえ回り道しようとも——誤ることなく4となり、そして飛行術は——たとえ戦争に利用されるにしても——戦争を消滅させる。

どのようにして？ これに関しては、のちほど考察することにしよう。さしあたりここで

は、簡潔に歴史を振り返るとしよう。とはいえイカルス³⁾まで遡るのではなく、第1回ハーグ平和会議までとしたい。

1899年、26カ国の代表がハーグに集い、戦争防止について（残念なことに、同時に戦争遂行についても）話し合いが持たれたが、その時パリで営々と建造されていた飛行船は、操縦性の問題を解決するという話だった。立ちのぼる噂によれば、解決はうまくいったという。そして今度は、試みは失敗したと伝えられたが、その後、成功したという新たな知らせが届いた。W. T. ステッド⁴⁾がハーグのある新聞に連日寄せていた会議録で次のように書いていたのを、私は覚えている。「フランス人は気球を操縦しながら、協議が行われている『森の館』⁵⁾の周りを旋回しているが、それは、もはや未来において戦争遂行は不可能であることを一挙に証明するかのようなようだった。」

会議はこの問題に取り組み、戦争の慣行についての協定に、空からの爆弾投下を禁止する条項を盛り込んだ。この条約の期限は、5年であった。

この制限にそろって署名したのは、戦争は考えるすべての手段を用いるということに無知な素人だけだったが、彼らでさえ次のように考えたであろう。今後5年の間は——とにもかくにも——操縦性の問題は間違いなく依然として解決されないだろう、それならば安心して署名できるわけだ、と。

8年後の1907年、第2回ハーグ会議が開かれたとき、フランスはすでに幾隻かの飛行船を所有し、ドイツではツェッペリン⁶⁾が勝ち誇っていた。条約期限の5年は経過し、この禁止は更新こそされたものの、批准されることはなかった。

それでは果たして、空からの爆撃は許されたのだろうか？

「ありがたいことに、それに対する答えは安心させるものだった（不安を抱く文民が将来の防衛について尋ねたとき軍人が請け合ってくれる言葉ほど、人を落ち着かせ、なだめ、心を鎮めてくれるものはない）——ありがたいことに、飛行船が用いられるのは偵察活動だけである。飛行船の飛ぶ高みから、そして飛び過ぎて行く飛行船から狙い撃ちしたところで、それが命中する可能性はまったくない——気球から地上や海上にある標的を狙うよりは、むしろ6階のバルコニーから路面に置かれたニッケル貨に向けて唾を吐くほうが容易だろう。そうだ、そうなのだ、上空から撃とうなどと考えられるのは素人だけ、操縦が可能になった飛行船とて役に立つのは偵察活動だけである。しかし、その方面では計り知れぬ価値がある。」

計り知れぬ？ 誰にとって？ 私たち、それとも、ほかの人たちに？ いわゆる戦闘手段としての利点や長所は常に相殺し合うものであり、後に残るのは双方にとっての重大な損害だけなのだが、「改良された」手法と道具が賞賛される際、それはいつも忘れられる。

そうこうしている間に、アメリカから知らせが届いた。ライト兄弟が——空気よりも重い

——飛行装置を作り上げた、それははいよいよ本当に天空を征服した、とのことだった。すなわち、飛行機械である。⁷⁾しかしそれは何という現実離れした夢物語だろう。アメリカからのニュースは明らかに戯言だ。あるいは、実際に数回わずかな距離を飛ぶことに成功していたとしても、本当の飛行、戦時や平時における飛行機の実用的な使用までにはなんと遠いことであろう、何かができるようになるのは（それが実現するにせよ）何十年先のことであろう。それまでにはまたしても「長い時間がかかる」だろう。

しかし見るがいい、凄まじい早さで航空飛行術は普及し、——エッフェル塔は周回飛行され、ドーバー海峡は横断された。それは1909年のことであった。⁸⁾

わずか3年が過ぎ、今日、我々の状況はどうなっているのだろうか？ あらゆる国において軍当局は飛行部隊を導入している。あまつさえ中華民国も、ヴィーナー・ノイシュタット⁹⁾で軍用のエトリッヒ単葉飛行機を購入した。この調子で行くならば、10年後、我々を取り巻く状況はどうなるのだろうか？

こうした問いかけに対して、その道の権威たちは答えを拒んでいる。問題は、いつでも現下の課題だけなのだ。隣人が1隻の飛行船を保有している、故に私も1隻建造せねばならない、ほかの隣人は2機の飛行機を発注した、それならば私も2機、できれば3機を保有しなければならない。このような計算式によって、ほかのどのような考慮も、どのような予測も排除されてしまう。

ところで、飛行船や飛行装置を攻撃用兵器として導入すべきか否かということについての議論は、ことごとく事実¹⁰⁾に追い越されてしまった——兵器はすでに導入されてしまっているのだ。イタリア人はトリポリ戦争において最初の「空の魚雷」を使用し、そこから空爆は戦争における既存の経験かつ習慣に数えられるようになった。それゆえこれは国際法の問題なのである。

戦争学や戦争哲学それ自体の立場からすれば、空の征服は画期的大変革である。しばらくの間は、古い方法、古い概念をこのまったく新しい領域に持ち込もうという試みが続けられるだろう。そのような試みとして、今、例えば早くも「制空権」をめぐる戦いについて語られている。すでに「いわゆる制海権」は、土地の一部に対する実際の支配といった領域から、征服しがたい海洋の道筋へと転用された錯乱概念だった。ところで、無限の大気圏において占有し支配できる何が存在するのか、それを言うことのできる者は誰もいなかった。

戦争というシステムの全体——その競技ルール全体、とすることもできよう——は、次のような前提の上に成り立っている。

敵軍双方は互いに国境目指して進軍し、越境を窺うか、あるいは、他方が越境しようとする

のを妨げようとする。陣地を獲得し、確保しようとする、できうるならば首都にまで前進し、そしてそれに成功すれば、講和を突きつける。

この競技を困難にするために、すでに平時において国境には要塞が建設され、地下には坑道が掘られている。それ以外に国内にはさらに多くの砦があり、その一つひとつを順に攻略しなければ敵は前進できないようになっていて、そのほかに両軍がぶつかり合うどの村、どの農場、それに墓地でも、守りが固められる。

海においても同じ競技が支持され、艦隊は岸に向かって押し寄せ、上陸は外を睨んだ要塞と機雷が阻もうとしている。そして今や新しい——空を飛ぶ——戦闘力が加わる。そうになると、越境は兎戯に等しい。要塞によって長く押しとどめられることはない。上空から焼夷弾を落としてそれらを破壊できるだけでなく、——あっさりと無視すればいいのだ。

進軍途中や兵舎にいる部隊の上には、雲から雨あられと死が降りかかる。鉄道の橋は上空から破壊され、騎兵集団は殲滅されるが、——境界がなく、さえぎる物もない空中では、攻め落とせる陣地もなく、それゆえ決着はつきようがない。

今もし諸国家が、これら新しく作られた状況のもと、相も変わらず、とうの昔に取り入れられた兵法で戦いに臨もうとするなら、それはまるでチェスの差し手二人が盤に向かい、次のように宣言したようなものだ。

我々は古い競技ルールを用いよう。ポーンは常に一枰^{ます}ずつ進み、ナイトは以前のごとく跳躍する、クイーンは最強のまま、キング¹⁰はキャスリング¹¹で安全な隅に引っ込ませることができる、しかし、新しいルールを我々は付け加えよう。我々のどちらも、上から何かを盤上へ落とし、すべての駒をひっくり返しても良いのだ。素晴らしい遊戯だ——これにはチェスの王者も感謝するだろう。

駒たちは、ずっと前から感謝している。

将来、空の戦争がどのような形をとるかについては、幾らかの想像力があれば、容易に思い描けるだろう。現代において最も空想力豊かな作家 H. G. ウェルズ¹²も、それを見事に成し遂げている。

最近、とりわけ戦記作家がよく発表する、未来の戦争を描く小説はほとんど信用できない。それらは大抵、並外れた軍備によって、如何にして自分の国が隙を狙う敵に対して輝かしい勝利を収め、世界を支配するに至るかを示す意図のもとに書かれている。それに傾向文学に向けられる不信は別にしても、そもそも現実政治の側では、予言というものはほとんど重要視されていない。それは夢物語や現実離れた空想の領域に含まれるものと考えられ、実務家と専門家は関わらないのである。

この新しい戦争兵器の威力がどれほどであるかを知るには、軍人流に言うなら、将来の戦争の「経験」を待たねばならない。

さて、或る事が起こるかどうかを確実に予言することはできない、というのはもちろん正しい。しかし、もしもその或る事が一定の条件のもとで起こるといふのであれば、それがどのように起こるに違いないかということは、確信を持って言える。休みなく熱し続けられた機械が空中に跳ね飛ぶということは、私には主張できない、——もしかしたら火夫が弁を開くかもしれないからだ。しかし、弁が開かれなければ機械は確実に爆発すると、きっぱり主張できるだろう。予言の正しさは、科学の正しさを測る試金石であるのは確かだ。

こうした見地に立てば、自然の力と論理的思考の原理に基づいて架空の将来像を描く——ジュール・ヴェルヌ¹³⁾やウェルズのような——作家の作品は、真実の可能性を秘めており、場合によっては重大な警告であると見なさなくてはならない。ここでは、こうした考えの下、幾つか小説から引用しよう。

最初は、空の戦争が勃発する前の、人間の行動についての考察である。¹⁴⁾

「——彼らは自分自身の事柄についてはとても精力的に追求したが、あの差し迫る脅威については、どれにも奇妙なほど無頓着であった。

人類にとって本当の危険を憂慮する者はいなかった。彼らは、自分たちの軍隊と艦隊がますます巨大化し、恐ろしい脅威となるのを見ていた。ついに彼らの戦艦の幾隻かは、中等教育に要する全年間経費と同じ額に達した。彼らは砲弾と破壊兵器を溜め込んで、ますます自国の流儀を押し通そうとし、ますます嫉妬に駆られて振舞うようになった。人種同士が互いに近づけば近づくほど敵意は高まったが、彼らは懸念も理解もしないまま、それを傍観した。そして自分たちの真っ只中で、悪意に満ち、貪欲で、良心に欠け、善をなす能力はないが悪事を働く力は備えた新聞が、悪しき意図を持って発行されるのを見ても、彼らは知らぬ振りをしていった。国家は実際のところ、新聞を監視していなかった。火花を待つばかりのこの導火線が火薬庫の扉の前に置かれているのを見ても、彼らが気に留めることは微塵もなかった。その時、過去の世界史のすべては文明崩壊に関する唯一の膨大な報告書であり、現下の危険は誰の目にも見える場所にあった。彼らがこの危険を見ることができなかつたとは、もはや今日では信じがたい。

人間は空の戦争を防げたのではないか？ 意味のない質問だ！ 彼らは防げなかつた、それは彼らがその禍^{わざわい}を止めなかつたから、止める意志を持たなかつたからだ！ もしも人類が別の意志に従っていたら一体何を成し遂げられたかと問うのは、壮大ではあるが無意味な問題である。

今般、西欧化した世界に訪れたのは、ゆっくりした衰退ではない。古代文明は腐敗して崩壊

したが、西欧文明はいわば吹き飛んだのだ。

それは5年という期間の内に、跡形もなく壊滅した。空の戦争の前夜までは、まさしく比類ない進歩の姿を見せていた。世界中に安定が行き渡り、見事に組織化された産業と秩序正しい住民は壮大な景観を作り出して、途方もなく広がる巨大都市が存在していた。大海には船が行き交い、陸地には鉄道と道路の網が張りめぐらされていた。それが突然、思いもかけず飛行機が舞台を一転させ、私たちは終わりの始まりに立っているのである。」

「新しい武器」の使用によって起こる戦闘と大量殺戮、破壊についての記念碑的な描写を、この本を読んで拾い集めねばならない。ここでは作者によって予測された、その後の出来事のみ引用する。

「——それが起こると、世界の金融構造全体が揺らいだ。北大西洋のアメリカ艦隊が壊滅し、バルト海におけるドイツの海軍力を壊滅させる衝突が起こり、世界四大都市の数十億ポンドの資産が焼き払われ、打ち砕かれた。それによって初めて、戦争という高くつく絶望のすべてが明らかになり、まるで人類は雷に打たれたかのようなだった。債権は、売りが殺到して屑となった。かつての恐慌の際にも見られた現象が、より激しい姿となって、ここかしこで起きていた。人々は物価が底を打つ前に、金を掴み、溜め込もうとした。その欲望は、今や劫火のように全世界に広がった。空の上では誰の目にも見える戦闘が繰り広げられ、破壊が進行していた。しかし地上では、人類が盲目的に信じていた金融と商業の制度を支える極めて不安定な構造全体に、はるかに禍に満ち、はるかに致命的なことが起きていた。そして上空で飛行船が戦っている間、地上では目に見えて、世界中の手持ち資金が消えて行った。あらゆるものに対する不信が、流行病のように全世界に蔓延した。わずか数週で、無価値となった紙切れを除いて、金は消えた……天井裏、穴倉、家の壁裏、多くのゴミバケツの中、そして秘密の隠し場所へと。金が消えた……すると商業と産業がその影響を受けて機能を停止した。金融世界全体がよろめき、崩壊した。それはペストが猛威を振るったかのようなだった……まるで生きた人間の血から水分が消えたようだった……あらゆる流通が突如一斉に停止したかのようなだった。

そして科学文明の生きた砦であった債権システムが揺らぎ、金融上の関係で結ばれていた幾百万の人々の上に崩れ落ちる間、またこれらの人間が皆、債権が完全に無効になるという世界の不思議に動揺し、為すすべもなく凝視している間、アジアの飛行船は容赦なく続々と天空に飛び立ち、東方のアメリカ……そして西方のヨーロッパへと飛来した。そして歴史の調べを記した楽譜は、戦闘の長いクレッシェンドで埋め尽くされた。

社会全体の崩壊は、世界大戦の当然の結果だった。人口の多い地域では、大量の人々が職を失い、お金がなく、生計を維持できなかった。——次に第4の段階が訪れた。このカオスと戦っている最中に、飢饉の後を追って、今度は人類にとってのもうひとつの古い敵である疫病

——赤死病がやってきた。

しかし、戦争は止まることを知らない。旗は、今なお翻っている。新しい航空機や新型の飛行船が誕生している。そして、それらが空を飛び交う戦闘の下で、世界の闇はいっそう濃くなっている……それでも世界史は、この戦いを気にも留めないままだった。空の戦争は、さらに続いた。それはただ、いかなる当局にも、指導者たちの中にも、空の戦争に反対し、交渉を行い、それに終止符を打つことのできる者が一人もいなかったからである。そして終に、組織化されていた世界中の政府は、どれも陶磁器を棒で打ち砕いたかのように粉々になり、瓦礫の山となった。

大国や帝国は、人々の口の端に上るだけの、ただの名前と化してしまった。どこを見ても、廃墟、埋葬されることのない死体、ぼろぼろの服をまとい、死人のように無表情な青ざめた生存者ばかりだ。ここには盗賊、そこには自警団、そしてあそこには疲弊した土地の幾らかを支配するゲリラ部隊がいる。奇妙な結び付きや団体が、現れては消えている。絶望から生まれた宗教的な狂信は、空腹にぎらついた眼を燃え上がらせる。これは広範で巨大な解体である。美しい秩序も地上の豊かさも、すべてはじけ散る気泡のように萎んでいった。」

この本は、ある会話で終わっている。あの戦争時代を生き残った、非常に高齢な男が孫に語りかける。

「かつてこの近くで大きな戦いがあったのだよ、テディ、空高くでね。家を50軒集めたよりも大きな、水晶宮¹⁵⁾よりも大きな、比べる物が無いほど大きな物が幾つも空中をあちこち飛び回り、互いに攻撃しあったんだ。そして、死人が降るように空から落ちてきた。恐ろしいことだ。だけど彼らは、あらゆる商売ができなくなるほど人を殺したわけではない。そもそも商売はもうできなくなっていたんだよ、テディ、それにもうどこにもお金がなかった。あったとしても、買うものは何もなかったのだ。」

「だけど、どうやって人々は命を落としたの？」と、少年は尋ねた。

「話してあげよう、テディ。赤死病は、いとも簡単に人間の命を奪うのだよ。埋葬のことなど、もうまったく話題にもならなかった。犬や、猫、鼠、馬までも、そいつは連れて行くんだ。終いには、どの家も、どの庭も、死体でいっぱいになった。ひどい臭いで、ロンドンへ行くことすらできなかった。水道や下水も汚染されていた——赤死病がどこからやって来たのか、誰にも分からない……私が知っているのは、そいつが飢饉の後にやって来たということだけ。そして、飢饉は恐慌の後にやってきた。そして、恐慌は戦争の後にやってきたのだ」

テディは思案してから、尋ねた。「赤死病は、何をしたの？」

「もうお前に聞かせただろう。」

「だけど、いったいどうして恐慌は起きたの？」

「どうしようもなかったのだ。」

「だけど、どうして戦争を始めたの？」

「なにしろ飛行船を持っていたから、そうするよりなかったのだ。」

「だけど、どうして戦争をやめなかったの？」

「身勝手だったからだよ。それによって、誰もが辛い思いをした——なのに誰もが、また他の人に辛い思いをさせた。そして何もかも、高慢さと愛国心でいっばいだった。そうやって彼らはすべてを台無しにしてしまう方を選んだのだ。彼らは、ただ続けた、ひたすらね。そして後になってから、絶望し、怒り狂った。」

「だけど、彼らはやめるべきだったんだね」と少年は言った。

「そもそも、それは始ま^ってはな^らな^かつたのだ」とトム老人は言った。「だが、人間は傲慢だった。そして思い上がり、うぬぼれていた。自分が譲^{ゆず}ること——それはなかった。しばらくすると、もう誰も、相手が譲^{ゆず}るべきだとも言わなくなった。もう誰も、それを望まなかった……」

彼は物思いに沈んで、やせた歯茎^なを舐めた。彼の視線は、飛び散った水晶宮のガラスが光を反射させている谷の上をさ迷っていた。幾つもの可能性を無駄に失ってしまったという、もやもやとした、とめどもない感情が、彼に押し寄せてきた。そして彼は、これらすべてについての最後の考えを——ゆっくりと、締めくくるように、あらゆる出来事に対する変えようのない非難の言葉を繰り返した。「思ったことを言えばいい」と彼は言った。「それは絶対に始ま^ってはいけなかった。」彼は、それをごく簡潔に述べた。「誰かが、どこかで、何かを阻止しなければいけなかったのだ。」

そのとおり、それは阻止されるべきだったのだ。しかしながら、何が起きているのだろうか？ 準備が進んでいるのだ。なるほど、我々はまだようやく、ほんの始まりに立っただけなのだが、それなのに、すでにどれほど空の戦争の準備を進めてしまったことか！ 私がこれを書いている今この時点で（1912年5月）、空を武装するための国家基金は、フランスでは300万フラン以上、ドイツでは200万マルク以上を集め、イタリアでは国王が——範を示すべく——自ら10万リラを基金に寄付し、そしてオーストリアでは戦争大臣がつい先頃、目下組織中である空軍協会のトップに自ら就任したと発表し、我が国でもこの「第4の武器」をしかるべく配備するため、これよりは——願わくは成果が得られるよう——国民の貢献が求められることになると呼びかけた。

それゆえいずれにせよ予想されるのは——たとえ空の戦争が起こらなかつたとしても、実際に諸国民の理性によってこの危険が回避できたとしても——いずれにしたところで、新たな

税、新たな物価高騰、狂気じみた軍備競争における新たな記録の樹立が、間近に迫っているということだ。

では、それを阻むために、それに歯止めをかけるために、どんな手が打たれているのだろうか？ 抗議の声が議会や新聞に上がっているのだろうか？ 社会民主党系の新聞を除けば、「リベラル」で穏健な世界中のあらゆる有力紙は、コメント抜きで、一言の異議も唱えることなく、それを伝えている。同じくコメント抜きで、彼らはその主導的立場に至極ふさわしく、募金を呼びかける記事を印刷する。そして眉一つ動かさずに、新しい兵器がトリポリ戦争においてすでに獲得した「成果」について報告している。つまり、空襲された隊列や陣営に引き起こされた混乱や破壊についてである。一体こうした報告を載せた人の中に、このような卑劣な殺戮に道徳的嫌悪感を抱く人間は一人もいないのだろうか？

怒りに駆られ、戒めを語る声は聞こえてこない。空飛ぶ兵器が未来において与える恐ろしい影響を喜ばしげに描き出す迎合的な声には、事欠くことはない。

『ガリア人』の中で、ロベール・ド・ミシェルは「来るべき独仏戦争」を描いている。

「宣戦が布告されていた。ライン川の対岸では、敵の軍勢がふたたびフランスに向け進んでいた。そして宣戦布告からちょうど2日後の192*年6月3日、最初の軍団がヴォージュ山脈¹⁶⁾に到達した。」ド・ミシェルの語るところによれば、偵察飛行機がこの進軍を発見し、それに続き、準備の整ったすべての飛行機に対し、無線電信によって出撃が指示される。

「まどろみの中にある野や畑の上、星明かりの空を、生ける矢は夜どおし一目散に飛び続けた（何たる天空の冒瀆^{ぼうとく}か！ B.ズットナー）。そして空が白みかかる時、50機の飛行機は東部国境に到達した。

そして今、深い沈黙に包まれながら、周到に用意された計画が実行に移された。午後4時、風が止み、大気が理想的に澄んだ時、一人の操縦士ともう一人の将校を乗せた50機の飛行機が飛び立った。これらは、100キログラムの榴弾、爆薬、メリナイト爆弾、そして空雷を装備していた。巨大な円陣を組んだ軍団は、国民のため命をかける覚悟を躊躇なく示す100人の英雄たちが現れると、ささげ銃^{つつ}をした。将校たちは剣を手に敬礼し、連隊旗は各機が離陸するごとに傾けられた。

そして訪れたのは歴史に二つとない事件、前代未聞の出来事であり、それはこの戦争、そしてあらゆる戦争に終焉をもたらした。それというのも、この時から戦争は不可能になったからである。……50機の鳥たちはヴォージュ山脈に到達していた。彼らは最初の前山の遥か上空を飛び過ぎ、それから第1の合図で、2日前からまるで両側を壁に挟まれたかのように峠道で押し合いへし合いする敵軍めがけて降下したのだ。第1の合図と同じく1番機が発した第2の合図によって、降下がとまった。エンジンの響きはふたたび鈍くなった。そして飛来した殺人

装置に今初めて気づき、まるで麻痺したかのように為す術なく見上げる敵軍の頭上で、飛行部隊は四方八方に散開した。同時に50人の将校たちは突如として鉄と火を雨のように降らせたが、この激しく一気に降り注ぎ、^{きょうあい}狭隘な山峽にひしめく連隊すべてを壊滅させる爆弾の雨は、どんな抵抗も無駄に、どんな退却も不可能にした。どうすればこの狭い石の廊下から空を舞う鷲たちを大砲で狙い撃ちできただろう？ 最後に投下された爆弾は、司令部を、そして王子たちと精鋭部隊をなぎ倒した。

彼方の地平線では、フランスへと帰る飛行隊が完璧な隊列を組んで飛んでいた。一方、刻々と影が延びつつある^{あいろ}隘路では、沈みゆく太陽の投げかける最後の光線が、ライン川へと敗走する皇帝軍最後の残党を照らしていた。」

こうしたことは、おそらくは起こらないであろう。しかしそれでもこれは、英知ある幾人もの人々が追い求め、勤勉な準備作業によって少なくともあり得ることとなった出来事を描いた未来図なのである。

しかし、こうした未来図を描き出しているのは物語の幻想だけではない。実際的かつ技術的な方法によっても、飛行場や展示場において、来たるべき空の戦争のメカニズムは好奇心旺盛な観衆に披露されている。ヴィーナー・ノイシュタットの軍用飛行場では、上昇した飛行機から爆弾に見立てられた砂袋が投下され、命中率がテストされている。そして大講堂で催された大航空学展では、規定通りに実行され成功した試射の実物展示として、撃破された武装ゴンドラを見ることができた。

ある絵入り雑誌では、この大講堂はとりわけ次のように描写されている。

「正確無比な名人芸で、経験豊かなオイラー、つまり最初の『真の』ドイツ人飛行士で操縦免許証番号1番を持つ航空術講師ハインリヒ王子¹⁷⁾は、我々に身の毛のよだつ、壮大な未来の空の戦争を見せてくれる。おおよその聴衆の考えとは異なり、飛行機からの爆弾投下が可能と信じる専門家はほとんどいない。未来の空の戦争は空からの戦争ではなく、空における戦争であり、飛行機対飛行船の戦いなのである。動かないようしっかり向きが固定された機関銃を機体に装備し、その照準は機体全体そのものを操縦することによって定められ、それは戦艦からの砲撃の照準を船体そのもの上下によって定めるのと同じである。飛行機の照尺は任意の距離に調節され、敵の戦闘機を照準線が捕えるや、銃弾が一気に連射される、——250発の集束弾道はほんの数秒後には敵の防御を引き裂き、5分間で3000発の砲火を浴びせることが可能だ。

『粗暴な力による手仕事』と呼ばれる戦争ほど現実味を帯びているものはないが、それでもその最新の兵器には感覚を麻痺させるようなロマンチズムが潜んでいる。我々の祖先たち

は、カタラウヌムの野における戦い¹⁸⁾について物語るとき、精霊たちも空中で戦っていたとおぼろげに感じていただけだった。しかし、それは現実となった。もっとも尊いものは命ではない、という意識に満ちあふれた若い将校たちが航空戦では自国が先んじていることを示さんと、群れをなして飛行士という任務に押し寄せているのを、我々は知っている。」

不思議なのは、このようなことを戦慄の叫びを上げず目にし読むためには、どのような黒そこひが人々の心の目を覆い、どのような角膜が彼らの鈍い心を覆っていなければいけないのか、ということだ。

すべての人が、このように鈍感に振る舞うわけではない。

先ほど引用した『ガリア人』の中に描き出され、そして同国人に未来の空の戦争における勝利という楽観的確信を吹き込むことになる空想の中に、フランスにおける警告の声もまた存在している。その声は、敵の優位とその計画について得られる限りの情報を得た通信員の持つ調子で、報告をしている。

パリの新聞『エクセルシオール』には次のように書いてある。

「我が国の参謀本部は、休むことなく、そして注意深く我々の仮想敵国のたゆまぬ日進月歩の進歩を見守ってきた。ここに集められる知らせは、日々ますます不安をかき立てている。もし早急に断固かつ徹底的な措置が講じられなければ、状況は間もなく極めて憂慮すべきものとなるだろう。いかに突飛に、いやそれどころか、いかに絵空事のように聞こえようとも、ドイツ参謀本部が目下練り上げている航空機の戦時動員計画の頂点は——我々はこの情報の信憑性に自信がある——パリ空襲である。熱に浮かされたように、ドイツの飛行士はこの計画を実行するための武装に精を出している。ドイツからフランスに発注された航空機の大部分がすでに引き渡されているのは、もはや疑いない。そして3月終わりには、我々の敵は飛行軍隊のために十分な数の飛行機を揃えたであろう。我々に届いた確実な知らせが示しているのは、大胆さという領域も行動力という領域も、我々の独断場ではないということだ。ドイツの飛行機の最初の任務は、ほかでもない、パリ爆撃である。これによって、戦闘が始まるやたちまちのうち両国の国民と軍隊は、その精神と感情において影響を受けることになる。政治的緊張の瞬間、ドイツ軍部が保有するすべての飛行機は、すぐさま国境に、すなわち2ヶ所か、可能なら3ヶ所に集結し、最初の追い風を待つのである。宣戦布告の瞬間には、所定の合図によってこれらすべての飛行士が飛び立ち、^{あつら} 誂え向きの有利な追い風に乗って時速160キロの速さでパリへと向かう航路を取る。このように、彼らがエッフェル塔に到達するには、ほんの数時間も要さない。そしてせいぜい30分の内に、彼らは我々の首都に1万キロの爆薬を降り注いでしまうのである。一機ごとに運ばれるのは、これらの爆薬のうち40キロである。——我々はこの殺戮者の侵入を阻止し、彼らが破壊活動を成し遂げるのを防ぐことはできるのだろうか？ 目下

のところは、否である。例を挙げれば、シャロン¹⁹⁾の兵營で今日、離陸の準備が整っている飛行機はたった2機にすぎない。そしてエタンプ²⁰⁾では数週間前から飛行機は全機修理中なのである。」

この秀逸なラプソディーの結末は一目瞭然だ。速やかに国民を扇動し、国境警備につく（そして同時に——これは差し当たり口外されないが——ベルリンを脅かす）無数の戦闘機を即刻建造するための財源を確保するのである。

もし平和主義的世界観が好戦主義的世界観に対して優位に立っていれば、事態はまったく違った成り行きをたどり、航空術は新たな、より良い時代をもたらすことができたはずだ。しかし、現実とは違う。2年前、パリで次のようなことがあった。

今日では空軍のための募金に協力している『ジュルナル』紙が、当時、首都から首都をつなぐ周回飛行（パリ、ベルリン、ロンドン、ブリュッセル、パリ）の実行に20万フランの懸賞金をかけ、次のような呼びかけを掲げた。

飛行機、それは平和の道具

「人類は歴史の転回点に立っている。人々がその所有をめぐって争う象徴である土地と地表から離れ、人間は無量で不可分の領域という、それまで誰もとどめておくことのできなかった空の高みへと入った。もし何かがやって来て——かつてのノアの方舟の鳩のように——^{もろもろ}諸々の人種と国家の間に数百年も昔からわだかまる^{えんこん}怨恨をぬぐい去るのならば、それはこの高みの領域からやってくるだろう。なぜならこの、あらゆる人々が共有し、分かつことも奪われることもない領域が征服可能となるのは、ただ人類が自分自身に——すなわち自らの狂熱と高慢、偏見、そして憎しみの感情に打ち勝ち、人類共通の幸福という同じ願いのもとで一つになるときだけなのだから。」

同様の平和主義的感激が、さらに続いた。反響は大きかった。世界各地のもっとも著名な飛行士たちが参加を名乗り出た。あるドイツ紙は賞金にさらに10万マルクを上乗せし、この国際飛行の出発は1911年6月4日と決められた。

しかし、それは実現しなかった。すでにすべての準備が整っていたとき、パリの国粋主義的新闻各紙と国家主義的扇動家たち、とりわけカメロ・デュ・ロワ²¹⁾が、このような「非愛国的」考えに激しく異論を唱えた結果、『ジュルナル』は呼びかけを撤回し、催しは中止を余儀なくされた。

そして今日は？——世の風潮は実にすばやく逆転することが可能である。ただ残念なのは、もっとも効果的な成果を上げた声明は、今まで常に好戦的精神に貫かれたものなのである。なぜならそれはもっとも声高で、権力の中枢に支持され、そして常に^{い、いだくだく}唯々諾々とした大衆を昔馴染

染みの感情のルールへと押しやるからである。そこで大衆は——最小の抵抗力に関する法則通りに——実に軽やかに滑って行く。

あるイタリア将校が『ヴィタ・インテルナツィオナーレ』に論説を発表し、飛行術を爆弾投下に利用することに対して抗議をしたが、彼の次の発言は興味深い。もちろん、これはトリポリ戦争勃発以前の事である。この戦争については、広大な空から初めて死の爆弾を投げ落としたという、戦争史上の栄誉（！）が与えられるだろう。伝え聞くところによれば、（意図的ではないことを願うが）赤い半月旗²²⁾の翻る野戦病院もその標的となったと言われている。

「(空を征服し攻撃に利用することへの世間の熱狂について) 少しばかり不協和音を奏でることをお許し頂きたい (とカルメロ・ペラッツィ大佐は書いている)。私を突き動かしているのは、激しく心を揺さぶる思いだ。その思いにとらわれるや、私たちはただひとつの叫び、すなわち文明世界全体に訴える声を上げずにはいられない。もう十分だ！ 人間の尊厳を守るためには、もうやめねばならない！ 私がこのように発言するのは、人間精神の成果のひとつひとつを、その最も気高く純粋なものまでも戦争という野蛮な理念に組み込む、文化という概念に対する不道徳な冒瀆に腹をすえかねたからである。

——軍隊が科学上の新発見を^{ことごと}悉く取り入れてゆく過程には、戦争を高貴なものにし、発展を続ける文明に相ふさわしいものにしてしようという目的、——というよりは幻想があるように思えてならない。それはちょうど、絞首台の代わりに電気椅子を用いれば、死刑の与える恥辱が減らされるように思えるかもしれないのと同じである。

しかし、それは正真正銘の夢物語である。戦争は古いしきたりであり、その本質において、残酷かつ野蛮なものである。戦争は今日においても穴居人の時代と同じであるし、これからも戦争がある限り同様であり続けるだろう。」

さらにこの論説の筆者は、もしも戦士たちが地上を離れて広い空に展開することになれば、戦力の測定が不可能になると分析している。空中の戦士たちは、特に無限に広がる夜の虚空にあっては、いかなる発見、追跡、攻略も及ばない。別の表現をすれば、各国の軍隊が備える実兵力も、相手戦力の測定にこそ意味のある戦争も、その根拠を失うであろう。

「さて、もしこれが飛行術を戦争のために利用した結果ならば」——論説の締めくくりはこうである。——「つまり、空の軍備を推進する人々がまったく望んでいない結果になるならば、どうだろう。——というのも、軍用飛行機が大群となって飛来したとしても、祝福されることになるのだから。あるいは、軍人たちが新兵器に心から寄せている信頼が、その外部で反響を呼べばどうなるだろう。新しい航空産業の投機精神は、このようにして報酬を得ようとしているからだ——とんでもないことだ！ 偉大な成果を前に、この偉業に含まれている高貴

な理念を前に、目下のところ軍当局から出されている支援と激励は、今や新しい省庁から来ることにならなければいけない。その省庁とは、——今後は文明化した諸国民の運命を左右することになる、たった一つの——文化と進歩のための省庁である。」

武装した飛行船の使用に反対する覚書

(イギリスの教会、貴族、政治、学問、芸術の各界を代表する偉人300名による署名。その中には、10名の国教会主教、先ごろ逝去したリスター卿²³⁾、人気作家トマス・ハーディ²⁴⁾、ジョン・ゴールズワージー²⁵⁾、H. G. ウェルズ、コナン・ドイル²⁶⁾等の名前がある)

「私たち署名者は、戦争における武装した飛行機の使用に抗議する。すべての政府に対し、目下の戦争の残虐行為に新たな脅威が加わることから世界を守るべく、あらゆる可能な手立てを講じて国際的合意を形成するよう、私たちは呼びかける。

普遍的な合意なくしては、どの強国もこの災いを阻止することはできず、その災いのために日々英知が傾けられ、予算が費やされてゆけば、そのような合意の可能性は難しくなる。

機会は一度しかない。文明世界は、今や戦争がもたらす恐怖と浪費を認識した。ハーグ会議は、現実で開催されたのである。戦争の手段が進歩していく過程において、初めて諸国家は、その進歩を効果的に阻止するために必要な意識を持ち、必要な仕組みを持つにいたった。

教養を備えたすべての国家は、平和と友好を望み、今や著しく財政を圧迫する軍備負担を避けたいと望んでいる。この明言がつまらぬ偽善でないとすれば、空が支配され、人間が作り上げた機械の中で最も名誉あるこの機械の発明が愚かにも破壊目的に利用されるのを、黙って見過ごすことはできない。軍備負担の深刻な増加をもたらす新たな道がとられるのを、何もせずに認めるわけにはいかないのである。

その恐ろしさゆえに人間に戦争を断念させる空の戦争は、禍という仮面を被った祝福である、このように考える人はおそらく多い。その人たちに言おう。それでも教養世界は、新しい、手当て可能な型の病がもたらす惨害を認めることはない。たとえその惨害によって恐怖に陥った人間たちがますます必死に結びつき合い、あらゆる型の病気の撲滅を目指すよう仕向けられたとしても、である。さらに、こうも言いたい。人間の本性がいかなる形の恐怖にも耐えることはとっくに証明されているが、あなた方はその適応能力を過小評価している。

また、戦争という刺激がなければ飛行技術は満足に発展しない、と言う人もいる。その人たちに考えてもらいたい。人類の歴史を見れば、需要があるところには——たとえ平和な生活という目的のためにすぎなくとも——供給もあるという希望を、私たちは失うことはない。それらを相互破壊のためにではなく、相互援助のために利用すると決断したことによって飛行技術

の進歩が実際に数年間遅れることがあったとしても、それは人類にとって決して損失ではないだろう。

すでに地上と水上で戦っているのだから、同様に空中で戦ってもよいのだ、と考えている人は多い。その人たちに答えたい。今日まで、陸と水で用いる戦争道具の排除が現実にも可能だったことは一瞬もなかった。しかし、空の兵器を排除することが実際に可能となる瞬間はある。その瞬間とは、この道具の利用が試される前の、そして大きな関心がそこに集まる前の——まさに今なのである。政府には、人類の現在だけでなく、未来も委ねられている。運命はこの決定的な瞬間を、政府の手に委ねた。私たちが切に願うのは、彼らがそれを賢明にも行使することである。」

今まで、この呼びかけが聞き入れられることはなく、無視されたままだった。理性の声が、もうそろそろ、そのことに慣れてしまっているのは間違いない。

軍人の間では二つの原則が認められているが、その中身を見れば、軍当局の空軍問題に対する態度が十分理解できる。すなわち、

1. いかなる新しい技術的方法も軍備に応用しなくてはならない。それは破壊力があるほど望ましい。
2. 「他国」が軍事力増強のためになすことはすべて、「我々」もすぐにも模倣し、可能ならばそれを凌駕しなくてはならない。

この二つの原則により、すでに四つの武器において揺らぐことなく遵守されてきた当然のやり方が、「第5の武器」においても十分に公言され、正当化されるのである。方向はすべて決まっていて、道は真っすぐで、目的地は見えている。この二つの原則を馬の目隠し革のように用いて精神の目を覆い、ひたすら真っすぐ進め、と命じる、——もはや右や左の考えは存在しない。付随的影響や結果についての問題は議論されないままである。「それからどうなるのか？」という問いは、返答のないまま放置されるか、やんわりと脇へ追いやられる。

あの二つの目隠し革によって、ことはすこぶる順調に^{はかど}捗るにちがいない。というのも、奇妙なことに大衆も議会も新聞も、皆がそれを身に着けて、いかなる手段も防衛力の強化のために役立てねばならない、隣国がするから我々もそうするのだ、そうに違いない、と思いつむのである。声を聞き入れられることのない、ほんの少数の者だけが、「それからどうなるのか？」という不安を潜ませた問いに苦しむのである。飛行装置がこの4年間と同じ勢いで今後の10年間に増加し、飛行機の大軍が太陽の光を遮るほどになれば、それからどうなるのか？すでにツアーがマニフェスト²⁷⁾を公けにした時代に、もはや賄いきれないと認められていた軍事費が、物価上昇や貧困にもかかわらず、さらに増大することになれば、それからどうなるのか？

さらなる発明がなされ（どこで遠隔操作の船を止めるのか？）、今の無線電報のように、死と破壊がいわば無線によってあらゆる場所にばらまかれることになれば、それから一体どうなるのか？

さあ、どうなるのか説明をせよ！

しかしまた、この気懸りな問いが脳裏から離れないあなた方も、それをもっと大きな声で叫ぶべきである！ 沈黙したり、無気力であったり、諦めていてはならない。あなた方の良心のためらい、心の内にある抗議の声を、「どうせ無駄だから」という臆病な嘆息で抑圧してはならない。無駄なことは、ひとつもない。悪いことが起こるときは、それを行う人だけでなく、それを黙って見過ごす人にも罪がある。

もちろん私たち反戦論者は、釜の炎がこのように激しく立ち上れば、当然「戦争」という釜が丸ごと弾けると考える。このように考えるのは、妥当なことである。とんでもないことに、文化全体が一緒に吹き飛んでしまうかもしれないのだ。あるいは、避けうるはずの、恐ろしい破局が突如として始まるかもしれないのだ。それに真実と知っていることを口にせず、悪や危険と認識していることに、いついかなるときも全力で立ち向かわないのは、不名誉なことである。

それに、その方法はとても単純であり——簡単なのだ。イギリスの覚書にあるように、列強は取り決めを行い、第1回ハーグ会議のときのように、飛行船や飛行機からの爆撃を禁止する国際法を定めねばならない。私たちは井戸に毒を入れることを禁止したのではなかったか、ダムダム弾や諸々のことを禁止したのではなかったか、今度はまずすべてを——たとえば伝染病の病原菌を敵国に撒くことまでも——許されることとしなければならないのだろうか？

私は、この取り急ぎ公けにする冊子の中で述べたすべてを（それは私と無数の同時代人の心に燃えているものの百分の一にも満たないが）、声明の形にまとめた。詳細な根拠は省略し、簡潔にしよう——この声明に署名を望んだ人々はもとより同じ心であるし、この声明の反響が十分に大きくなれば、これを読む人々は、その内容によってではなく、その反響によって心を動かされるであろう。たとえ彼らが耳を閉ざし、助けを求める声が救いに結びつかないとしても、これは自らの良心を解放する叫びとなり、禍に手を貸さなかった数名の名前が記された、後世のための証拠となるのである。

声明

破滅をもたらす浪費と文化を脅かす危機、そして最近征服された天空への戦争拡大を含む、

文化的良心を損なう蛮行を前にして、私たちは今や至る所で始まっている飛行船の武装化を扇動する動きに抗議する。

野戦病院までも狙われた可能性のある、トリポリで実行に移された飛行機からの爆弾投下に対して、とりわけ激しく抗議する。

そしてできるだけ早く——可能ならば次のハーグ会議開催前に——第1回ハーグ会議において5年という期限で採択された飛行船からの爆弾投下禁止を更新するため、列強間で協定を結ぶよう国民の代表者と指導者に強く求める。

理性と慈悲の名において、そしてその誇るべき最新の偉業が一層高い文明時代への展望を切り開いた人間精神の名において、そして神の名（ここでいう神とは、信仰のあるなしに関わらず、各人が仰ぎ見る最も崇高なものと気高いものを含む）において、この要求は唱えられねばならない。

テキスト

Bertha von Suttner : Die Barbalisierung der Luft. Verlag der Friedens-Warte, Berlin 1912.

注

- 1) Bertha von Suttner (1843–1914)。オーストリアの小説家、平和運動家。キンスキー家の伯爵令嬢としてプラハに生まれ、33歳のときにウィーン北西の町ハルマンズドルフに領地を持つズットナー男爵家の令息アルトゥーアと結婚。1889年に反戦小説『武器を捨てよ！』（„Die Waffen nieder!“）を発表した後、オーストリアに平和協会を設立し、ハーグ平和会議をはじめとする様々な国際平和会議に協力するなど、ヨーロッパの平和運動の最前線で活躍する。一時期A. ノーベルの秘書を務めたことから、彼と生涯に渡る親交を保ち、ノーベル平和賞の設立にも大きな影響を与えた。1905年、女性として初のノーベル平和賞を受賞。彼女の主要な文学作品は、Bertha von Suttner : Gesammelte Schriften. 12 Bde. Dresden 1907. に収録。邦訳では代表作『武器を捨てよ！』（ズットナー研究会訳、新日本出版社、2011年）が出版されている。
- 2) Bertha von Suttner : Der Kampf um die Vermeidung des Weltkriegs. Randglossen aus zwei Jahrzehnten zu den Zeitereignissen vor der Katastrophe. 2 Bde. Zürich 1917.
- 3) ギリシャ神話に登場する少年。羽根を鐵で固めて作った翼で父とともに空を飛ぶが、あまりに高く飛翔したため太陽の熱で餌が溶け、墜落する。
- 4) William Thomas Stead (1849–1912)。イギリスのジャーナリスト。月刊誌『レヴュー・オブ・レヴュー』創刊者。
- 5) オレンジ王家の夏の離宮。平和会議の会議場となった。
- 6) Ferdinand von Zeppelin (1838–1917)。ドイツの元軍人で発明家。また「ツェッペリン」は彼が発明し実用化に成功したツェッペリン飛行船の略称。
- 7) 1903年12月17日、ライト兄弟は飛行機の初飛行に成功する。第1回の飛行は12秒間、飛距離はおおよそ37メートル。4回目の飛行で、59秒間、おおよそ260メートルを記録した。

- 8) 7月25日、ルイ・ブレリオ (1872-1936) はドーバー海峡横断初飛行に成功。10月18日、シャルル・ド・ランペール (1865-1944) はパリのエッフェル塔を50分あまり周回飛行した。
- 9) オーストリアの首都ウィーンの南方50キロに位置する町。1909年、飛行場が建設された。
- 10) ポーン、ナイト、クイーン、キングはチェスの駒。
- 11) キング (将棋の王将に相当) を安全な盤の端へ、ルーク (飛車に相当) を活躍しやすい中央へと同時に移動させる手。
- 12) Herbert George Wells (1866-1946)。イギリスの小説家、評論家。ロンドンの理科師範学校で学んだときに、進化論の立場をとる T. H. ハクスリーから大きな影響を受ける。『タイムマシン』(1895)、『宇宙戦争』(1898)、『空の戦争』(1908) など。
- 13) Jules Verne (1828-1905)。フランスの作家。劇場や証券取引所に勤務しながら劇作を続けていたが、その後多くの空想的科学小説を執筆して、SFの分野を切り開いた。『海底二万マイル』(1870)、『八十日間世界一周旅行』(1873) など。
- 14) 以下の引用は、ウェルズの『空の戦争』(1908) からのものである。
- 15) 第1回万国博覧会が1851年にロンドンで開催されたおり、J. バクストンの設計によって展示館として建設された建物。材料はほとんどが鉄とガラスで、その斬新で機械的な美しさから初期近代建築の代表作とされている。
- 16) 現在のフランス東部、アルザス・ロレーヌ地方にある山脈。この地方は歴史的にドイツとフランスそれぞれが領有権を主張してきた。『空の野蛮化』執筆当時はドイツ領 (1870-1919)。
- 17) August Heinrich Euler (1867-1957)。飛行機製造工場を造るなど、航空分野で活躍。ドイツ初の飛行操縦ライセンス取得者。
- 18) 451年、フン族と西ローマ・西ゴート連合軍が戦い、フン族が退けられる。
- 19) フランス北東部の都市。
- 20) パリ近郊の町。
- 21) 1908年に創設された国粋主義的暴力組織。
- 22) イスラム諸国で用いられている、赤十字社の標章 (赤新月) を指す。
- 23) Josef Lister (1827-1912)。イギリスの外科医。フェノールによる無菌手術の創始者。1897年に、医師として最初の男爵を授けられる。
- 24) Thomas Hardy (1840-1928)。イギリスの小説家、作家。代表作に『テス』(1891)、ナポレオン戦争を題材にした長編叙事詩『霸王』(1903-08) など。
- 25) John Galsworthy (1867-1933)。イギリスの小説家、劇作家。代表作に、三部作『フォーサイト家の記録』など。1932年にノーベル文学賞受賞。
- 26) Conan Doyle (1859-1930)。イギリスの推理小説作家。「シャーロック・ホームズ」シリーズで人気を博す。
- 27) ロシア皇帝ニコライ2世は、1894年に軍備縮小と国際平和会議の開催を求める平和のマニフェストを布告した。

Bertha von Suttner: “The Barbarization of the Sky”
(„Die Barbarisierung der Luft“)

Translated by Osamu ITOIGAWA and Mitsuo NAKAMURA
Foreword by Peter van den Dungen (Translated by Kazuyo Yamane)

“The Barbarization of the Sky” („Die Barbarisierung der Luft“) is a booklet published in 1912 written by Bertha von Suttner (1843–1914), the Austrian novelist, peace activist and first woman Nobel Peace prize laureate (1905). Following the success of her novel, “Lay Down Your Arms!” (1889), she became a leader of the European and international peace movement who incessantly wrote (and organised) for disarmament and the abolition of war, especially for preventing a threatening world war.

This essay, one of the many fruits of her political journalism, warns of the possibility of the destruction of civilization as H. G. Wells had depicted in his science fiction when an airship or airplane is used for war as a result of the remarkable development of aviation technology. The direct motive for writing this essay was the first air raids in the Tripoli War in 1911. She published it as a booklet so that she could inform many people of the barbarization of the sky which she regarded as a serious problem in the history of civilization. This year marks the 100th anniversary of the publication of the essay. The Japanese translation of this important and prophetic essay makes it available to many new readers who will appreciate the author’s significant role in the peace movement of her time.